

未来へつなぐ 子どもと学ぶ

sign

サイン

No.14



特集

「安心してチャレンジできる場」
としての学校へ

学校を「みんながチャレンジできる場」に

これからの時代に必要な教育とは、どのようなものでしょうか。令和7年度の教育フォーラムでは、こうしたテーマでシンポジウムを開催し、熊本大学大学院教育学研究科の苫野一徳准教授、トヨタモビリティ富山の品川祐一郎代表取締役社長、富山市教育委員会の宮口克志教育長が意見を交わしました。進行は、元フジテレビアナウンサーの石本沙織さんが務めました。

※VUCA（ブーカ）とは…
「Volatility（変動性）」、「Uncertainty（不確実性）」、「Complexity（複雑性）」、「Ambiguity（曖昧性）」、それぞれの頭文字からとったもの」

壁にぶつかって「気づき」を得た子どもの例

現代は日々の変化が激しく、先行きを予測することが難しい「VUCA（※）の時代」といわれます。たとえばAIの技術は急速に発展し、数年後には、私たちの仕事や社会のあり方も大きく変わっているかもしれません。その中で、子どもたちの教育に必要なものとは何なのでしょう。シンポジウムでは、出席者それぞれが意見を述べました。

前例の無い出来事がたくさん起きるからこそ、「見たことのない課題に直面しても、子どもたちが果敢にチャレンジする力を育むのが教育の役割です」と話すのは、宮口教育長です。

「そのためには、失敗を恐れない気持ちを子どもたちに身につけてもらうことが大切です。一度つまずいても乗り越える経験を学校で作ってあげなければなりません。先生はそのサポートとして、子どもが壁にぶつかったら手を差し伸べるのです。たとえば子どもが何かに失敗したとき、その失敗を『次の成長への気づき』につなげることが重要です」

実際に気づきへとつながった事例として、ある授業でのエピソードが紹介されました。それは、人や動物など、さまざまなものが描かれた絵を見て、何かと何かを足して「合計で7にする」ものを見つけ出すお題を子どもたちが考えていた時のこと。ある子は、絵の中に見つけた4本のチューリップと3羽のアヒルに着目し、足して7にしようと考えました。しかし、7の後に続く“単位”をどうすればよいのか悩みだします。まさに壁にぶつかった瞬間でした。

宮口教育長は「この子は最適な単位を考える中で、『そもそもこの2つは種類が異なるから足せないのでは?』と考えました。足し算・引き算の基本的な法則を学んだ瞬間であり、失敗のように見えて、実はとても大切な気づきをしたのです。こうした時に、先生が『いいところに気づきましたね』と言葉をかけてあげると、子どもはこの経験を失敗として捉えず、次へのステップにつなげるのではないのでしょうか」と話します。

このように、先生が的確に反応できることで、クラス子ども全員にとって実生活で使う「生きた知識」となります。一見すると、先生は間違っていると声をかけてしまいそうですが、単なる間違いとして捉えるので

はなく、足し算の意味について深く考える機会を作り出すことが求められています。そうすることで、子どもの経験を失敗に終わらせず、成功へとつなぎ、そしてクラス全員で充実した学びを深めることができます。本市では、子どもの素直な疑問や経験を学びの可能性として見いだせるような教育を目指しています。

間違えても「成長の過程」と受け止めてあげる

哲学の視点から教育への提言を行っている苫野さんは、今の社会では失敗を恐れてチャレンジに踏み切れない人が多いと話します。「そこで重要なのが教育です。なぜなら学校は安心して失敗できる場であり、だからこそ先生方は、子どもたちに『学校ではどんどんチャレンジしていい』と伝えることが重要ではないでしょうか」と話します。「そのためには、先生も新しいことを積極的に行き、悩んだり、時にはつまずいたりする姿を見せることが必要だと思います。すると、子どもたちも『チャレンジしていいんだ』と感じるでしょう」

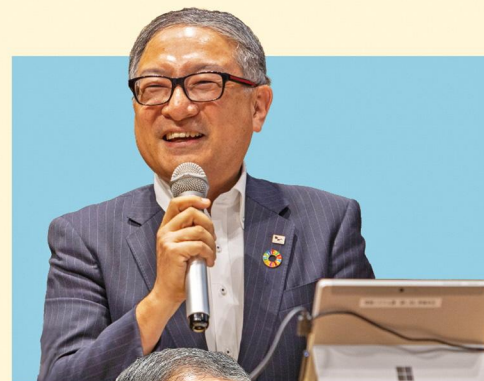
会社ではどうなのでしょう。品川さんは、経営者の立場から「失敗が成長を生むことは、企業でも同じです」と話します。ユニクロ創業者・柳井正さんの著書『一勝九敗』（新潮社）を例に出し、「会社を運営していれば10回に9回は失敗します。そこであきらめてしまえば成功はつかめません。最低限のルールを守った上で、果敢なチャレンジ精神と折れない心が求められるのです」と話します。

進行を務めた石本さんは、これらの話を聞き、親としての意見を伝えました。「子どもの失敗に対して厳しく言うと、次からは失敗を隠したり、ごまかしたりしてしまうかもしれません。エジソンの言葉に『私は一度も失敗したことはない。うまくいかない1万通りの方法を見つけたのだ』というものがありません。子どもが何かを間違えても、それを“成長の過程”と受け止めてあげることが大切だと感じます」

シンポジウムではこのほかに、富山市が目指す教育の現状などを説明しました。これからも、保護者や先生、地域のみなさまなど、さまざまな方の意見を伺いながら、新しい教育のあり方を追い求めていきます。



熊本大学大学院教育学研究科 准教授 苫野一徳さん



トヨタモビリティ富山 代表取締役社長 品川祐一郎さん



富山市教育委員会 宮口克志 教育長

challenge & try

英語では、「チャレンジ」は「困難な目標に挑む」、「トライ」は「物事を試してみる」という意味で使い分けられます。AIによる概要



元フジテレビアナウンサー 石本沙織さん



強くしなやかに 育つことを願って



(Q)これからチャレンジしてみたいこと:

(A)アロマについて詳しく学ぶこと。

いい香りで意欲がわいたり、癒されたりしています。もっと種類や効果を知りたい。

石動 瑞代

富山市教育委員

富山短期大学幼児教育学科教授

安心と挑戦の好循環

こども家庭庁の「はじめの100か月の育ちビジョン」に「安心と挑戦の循環」という言葉があります。生まれながら好奇心旺盛な子どもですが、その育ちは大人の関わり方に左右されます。子どもは、身近な大人の「温かく肯定的なまなざし」から安心を得て、主体的に行動します。失敗や困難に出会っても、大人からの受容と慰めがあれば立ち直り、再び挑戦する意欲が生まれます。この「好循環」こそが、豊かな育ちにつながる鍵です。

先入観や固定概念による影響

しかし、大人の先入観や固定概念が、子どもの育ちを妨げることがあります。例えば、大人が「主体的＝積極的な行動」と考えれば、子どもはそれを敏感に感じ取り、「したい」ではなく「認められたい」と、積極的な姿を見せようとします。このような他者基準による行動は、大人の評価が常に気になり、自己肯定感の育ちにつながりません。大人が発する暗黙のメッセージには、注意が必要です。

子どもの内なる力を信じて

私たちが子どもに望むのは、大人の評価によらず、内なる好奇心や探求心を安心して表現する姿です。そのためには、大人が期待する行動を引き出そうとするよりも、先入観なく子どもの自由な発想を受けとめることが大切です。その子らしい見方や考え方を認め、共に楽しみ、試行錯誤しながら寄り添うこと。このことが、子どもの「安心と挑戦の好循環」を支える土台となります。

学 校 再 編 新 聞

老田・古沢・池多の3校、令和9年4月に統合へ



「老田・古沢・池多小学校統合検討協議会」は10月22日、富山市役所を訪れ、令和9年4月に古沢、池多小を老田小に統合することを藤井裕久市長と宮口克志教育長に申し入れた。

当日は、協議会の中川雅之会長（老田自治振興会長）と長谷川敏博副会長（古沢自治振興会長）と林正幸副会長（池多自治振興副会長）のほか、各小学校PTAの代表者3名が出席した。

申入れでは、統合時期のほか、古沢、池多地区から通う児童のためのスクールバス運行を要望した。

申し入れを受けた市長と教育長は、「今までの歴史と伝統の上に立つて新しい地域づくりをしてもらいたい」、「子どもたちや保護者、地域の皆さんが統合してよかったと思っていただけよう、しっかりと環境を整備していきたい」と述べた。

今後、地域住民と学校関係者で構成する統合準備協議会を新たに立ち上げ、学用品や学校運営、PTA組織などについて具体的な協議を進める方針。

協議会が市長・教育長に申し入れ



◀ YouTube やってます！

signへのご意見・ご感想はこちらからお願いいたします ▶

